

# 情報や考えなどを伝える能力の向上を図る英語指導

—「英語表現 I」における教育実践—

甲斐 順

神奈川県立柏陽高等学校

## English Instruction Designed to Foster Students' Ability to Convey Information and Ideas

- Educational Strategies for Teaching English in English Expression I Classes at Senior High School Level-

KAI Jun

Hakuyo Senior High School, Kanagawa Prefecture

---

The purpose of this study was to evaluate an educational strategy, whose goal was to foster students' ability to convey information and ideas in English. The strategy, which relied on carefully designed instructions given in English, was implemented in English Expression I classes at a senior high school in Kanagawa Prefecture. The questionnaire results showed that most of the students who had received these instructions throughout the year felt that they were effective in developing their communicative abilities -- in particular, their writing and speaking skills. The results also revealed that most of the students were satisfied with the quality of instruction they received.

---

### 1.はじめに

平成21年3月に告示された高等学校学習指導要領の外国語に関する科目の1つとして、「英語表現 I」が選択履修科目として創設された。この科目は、「中学校におけるコミュニケーション能力の基礎を養うための総合的な指導を踏まえ、話したり書いたりする言語活動を中心に、情報や考えなどを伝える能力の向上を図るため」に創設された(文部科学省, 2010)ものである。この科目の目標は、「英語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するとともに、事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝える能力を養う」ことである(文部科学省, 2010)。科目の内容の(1)では「生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して、次のような言語活動を英語で行う」ことが記され、「ア 与えられた話題について、即興で話す。また、聞き手や目的に応じて簡

潔に話す」「イ 読み手や目的に応じて、簡潔に書く」「ウ 聞いたり読んだりしたこと、学んだことや経験したことに基づき、情報や考えなどをまとめ、発表する」の3つが掲げられている(文部科学省, 2010)。

平成25年度から高等学校学習指導要領の全面実施に伴い、上記の目標が掲げられた「英語表現 I」も選択履修科目として実施され、近年その実践が報告され始めた。北野・松坂(2017)は、アクティブ・ラーニングの趣旨をいかして、高校1年生の「英語表現 I」の7クラスで、仮定法を目標文法事項として生徒にワークシートを作成させ、生徒同士でワークシートの表彰を行った実践を報告している。北野・松坂(2017)の実践は、「主体的・対話的な深い学び」を示しているが、1年を通して継続的に行われた指導実践ではない。

小倉・山本(2016)は、山本が勤務する高等学校の「英語表現 I」の授業において、2学期の途中から授業改善に着手し、フォーカス・オン・フォーム形

式の授業を取り入れ、コミュニケーション活動を通して文法事項や英語による表現を定着させることを目指した授業実践を報告している。フォーカス・オン・フォームは、「意味の伝達を中心とした言語活動において、教師が必要に応じて学習者の注意を文法などの言語形式(form)に向けさせる指導」(白畑・富田・村野井・若林, 2009)で、近年英語教育の中で注目を浴びている指導法である。小倉・山本は、生徒に意識調査を行い、従来の授業と2学期以降の現在の授業を比較した。その結果、「現在の授業の方がコミュニケーション能力が高まると思う」と答えている生徒は、全体の62.8%、「以前の授業の方がコミュニケーション能力が高まる」が6.7%、「どちらとも言えない」が30.5%で、授業改善以降に取り組んだ形式の授業の方がコミュニケーション能力の向上に有効であると感じている生徒が多いことがわかった。小倉・山本(2016)は、文法を体系的に教えているという形から脱却できていない点に課題が見られること、また英語の使用場面を最初に設定し、その中で習得させたい文法事項があれば、その使用方法などを確認させる指導が必要であると述べている。小倉・山本(2016)の実践は、話したり書いたりする言語活動を中心に、情報や考えなどを伝える能力の向上を図っているが、1年間を通しての授業実践ではない。

これまでの「英語表現I」に関する実践研究は、いずれもアンケートによる感想に基づいた短期的な効果検証である。効果的な教授法の開発には、長期的な効果検証と授業への感想の変化研究だけではなく、実際の英語力の変化に対する教育法の効果検証が必要である。ただし、生徒の感想の変化研究は、授業を受けている最中やその後の勉強の動機づけを反映したものと考えられることから、長期にわたる感想の変化の検証は、英語学習とその持続の動機づけに関して有用な知見が得られる可能性がある。本研究では、英語力の実際の変化測定を実施する前に、1年にわたる授業全体での生徒の感想に基づいた効果検証を行うこととした。

## 2.研究の目的

話したり書いたりする言語活動を中心に、生徒の情報や考えなどを伝える能力の向上を図るため、「英語表現I」の1年間の指導を通じて行った具体的な活動及び生徒によるアンケートをもとに調査し、考察することを目的とした。

## 3.実践

### 3.1 対象者

本実践は、神奈川県立柏陽高等学校1年生のA組(40名)とB組(40名)の計2クラス(80名)の「英語表現I」を対象として行った。4月当初、英検の取得状況は、A組は、2級が2名、準2級が22名、3級が8名、未取得が8名、B組は、2級が3名、準2級が22名、3級が11名、4級が1名、未取得が3名であった。

### 3.2 使用教科書

教科書は、数研出版 *Revised POLESTAR English Expression I* (平成29年発行)を使用した。教科書の各課は4ページで Model Dialogs, Key Points, Pair Work, Adding Variations, Let's Listen, Practice, Express Yourself, Real-World English から構成されている。

### 3.3 授業展開

1年間を通して、各課を65分授業の3時間で終わるように次のような流れで授業を展開した。

#### 1) 1時間目

1時間目の授業の開始時は、「英語表現I」の内容で示された言語活動の「ア 与えられた話題について、即興で話す。また、聞き手や目的に応じて簡潔に話す」ことを目的として帯活動を行った。帯活動の1つとして、甲斐(2014)に見られるような対話活動を行った。例えば、現在完了形は中学校で学習済みなもので、完了形を取り扱う課の授業開始時、次のように板書した。

A1&2: Have you ever been to foreign countries?

B1: Yes, I have been to \_\_\_\_\_. / B2: No, I haven't.

A1: How many times have you been there?

/ A2: Which country do you want to go to and why?

B1: I've been there \_\_\_\_\_.

/ B2: I want to go to \_\_\_\_\_ because \_\_\_\_\_.

全体で発音練習した後、座席が隣同士の生徒に A または B の役をさせ、次に黒板から見て縦 2 列（12 名～14 名）を 1 グループとして、3 つのグループの中で、時計回りまたは反時計回りに 1 つずつ座席移動させ、ペアを替えてペアワークを続けた。これによりさまざまな生徒と対話する機会を得ることになる。その際、教師は板書を少しずつ消していき、クラス全体の中で指名されたペアが対話するときには、板書はほとんど消えている。教室内で座席が離れている生徒 2 名（例、窓側と廊下側）を指名していき、教師が突っ込みをいれながら対話させた。生徒同士の応答や教師と生徒の応答によって、教室内に感嘆の声や笑い声が漏れ、生徒も教師も情報や考えなどが伝わることを体感する。帯活動では、甲斐(2018)で示されている **Guessing Words**（ペアの一人が黒板に背を向けた生徒にヒントを出して、黒板に貼ってある 3 つの単語を当てさせる活動）、**Guessing Pictures**（ペアの一人が黒板に背を向けた生徒にヒントを出して、3 枚の写真[絵]を当てさせる活動）、**Describing & Drawing Pictures**（ペアの一人が黒板に背を向けた生徒に、人物や建物などを描写して 1 枚の絵を描かせる活動）などを行った。いずれの活動でも生徒は即興で、聞き手や目的に応じて簡潔に英語で話していた。

帯活動の後には、各課で学習する文法事項をまとめたプリントを配付し、目標文の発音練習と解説を行った。その後、教科書を開本させ、**Model Dialogs** を目で追いながら CD を聞かせ、隣合って座るペアに和訳させた。そして、**Model Dialogs** の CD 音声の対話の区切り毎にポーズを入れながら指名したペアに和訳させ、全体で内容を確認した。教師が **Model Dialogs** を範読した後、教師の後についてコーラス・リーディング、生徒全員によるバズ・リーディング、ペアによる役割練習を行った。次に、教師の指導のもとクラス全員で **Model Dialogs** の **Read & Look-up & Say** を行い、ペアで再度役割練習を行った。音読は、文法規則の自動化やスピーキングへの発展など

の効用がある(土屋, 2011)ことから行った。さらに **Let's Listen** の音声を流し、ペア及び全体で空所の確認を行った。最後に、教科書の **Practice** に取り組み、授業が終了した。

## 2) 2 時間目

前時に終了した教科書の **Practice** をペア、全体で確認した後、**Real-World English** (以下 **RWE**)を行った。CD 音声を聞かせる前の活動として、教科書の **Pre-listening Chat** や **RWE** の内容に関連する質問を提示し、ペアで対話させた。そして、**RWE** の **Listening Quiz** の音声を流し、内容に合うものを選び、ペア、全体で正答を確認する。甲斐(2017)は音声による正誤問題で、正答確認後、再度音声を聞かせ、正誤問題の英文全文を書き取らせるディクテーションを行っているが、本実践では **RWE** の各質問文について全文書き取りを行った。2 度質問文を聞かせ書き取らせた後、ペアで確認させ、再度質問文を聞かせ全体で確認を行った。ペアでの確認時間をとることにより、教室の張り詰めていた空気が緩むとともに、生徒同士で語彙や文法の知識を活用し合うことで、メタ言語力や英語力、協働力等を育むことになる(甲斐, 2017)。さらに、本文に空所を設けたプリントを配付し、今度は部分書き取りを行い、ペア、全体で確認した。ここまで徹底してディクテーションを行うのは、ディクテーションは、聞く力、書く力、語彙力、文法能力などを総合的に伸ばし、さらに、言語使用の正確さを高める効果があると考えられている(白畑他, 2009)からで、生徒の情報や考えなどを伝える能力の向上を図る一助となると考えたからである。

ディクテーションの後、教科書の **Express Yourself** を活用したプリントを配付し、取り組ませる。**Express Yourself** は、教科書を活用した作文活動に始まり、クラス全員の前でグループ代表者が発表する活動で終わった。図 1 は、教科書 **Lesson 8** の **Express Yourself** の例である。

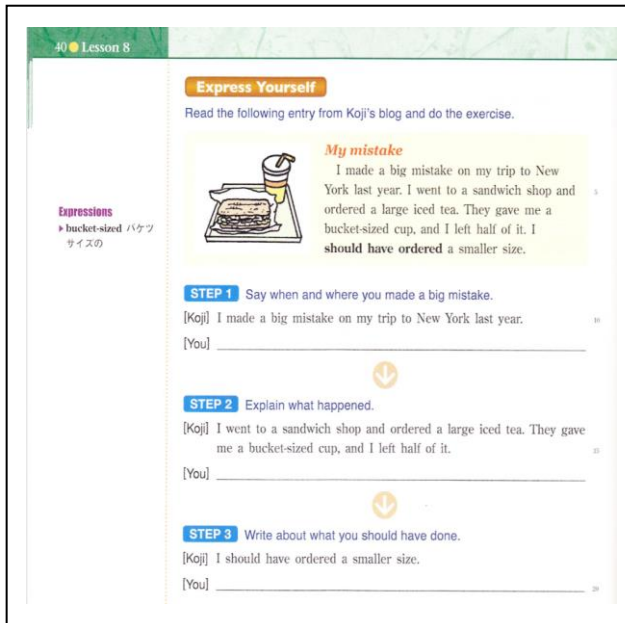


図1 教科書の Express Yourself の例 (数研出版 Revised POLESTAR English Expression I p. 40 より)

ここでは、段階を踏んで英文を書く手順が記されており、生徒はこの手順に則って、自分の考えや意見などを表現していく。そこで、図2のように、Express Yourself と題したプリントを生徒に配付した。プリントは、甲斐(2016)で述べられているように、1行に単語が5語書けるように直線が分かち書きされ、右側の余白に10語毎に数字が記されている。生徒は1行5語毎に単語を書いていけば良いので、語数を意識しながら書くことができる。また、教師にとっても生徒が書いた総語数が一目でわかるので便利である。生徒は授業終了の合図があるまで英作文を行う。

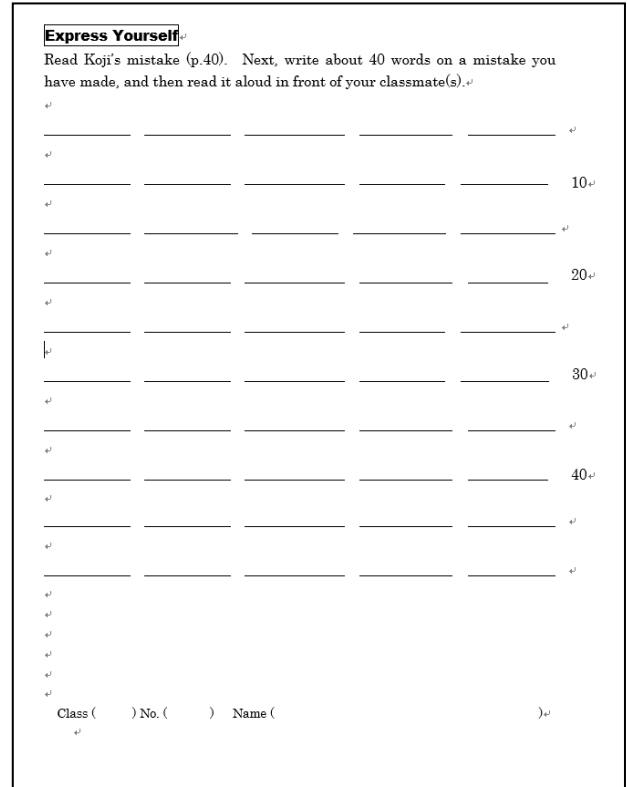


図2 Express Yourself のプリント

### 3) 3 時間目

3時間目は、グループ内発表、クラス発表で構成される(「グループ内発表1」→「グループ内発表2」→「グループ内発表3」→「クラス発表」)。Express Yourself を書き終えている生徒には、自習用プリントを配付し、生徒全員がグループ内発表できる段階まで待った。各グループは、4名からなる。「グループ内発表1」では4名全員がグループ内で順番に発表する。その際、Read & Look-up & Say を意識するように指示した。全員が発表を終えた後、4名のうち2名は他のグループに移動し、残りの2名は他のグループから移動してきた2名と一緒に新たなグループとして「グループ内発表2」を行った。全員の発表後、移動した2名は、さらに別のグループに移動し、「グループ内発表3」を行った。ただし、時間がない場合は、「グループ内発表3」を省略した。「グループ内発表3」が終わった段階で、各グループから発表者を1名選出させ、クラス発表を行った。40名クラスなので、毎回10名が発表した。教師が全体の講評をし、生徒の作文を回収し、授業は終わる。

図3は生徒の作品例である。

1年 英語表現 I

**Express Yourself**  
Read Koji's mistake (p.40). Next, write about 40 words on a mistake you have made, and then read it aloud in front of your classmate(s).

I made a small mistake  
this year. I wanted to 10  
go to Hanabishi Station so  
I got on Odakyu at 20  
Ebina station. But I got  
on the wrong train and 30  
I had to return to  
Ebina station. I should have 40  
checked the train carefully.

Class  No.  Name

図3 生徒の作品例

回収した英作文については、英文の誤りはすべて訂正し、コメントを書いて、次の授業で返却した。その際、良い作文については名前を伏せてプリントにして配付した。生徒の英文をすべて訂正するのは教師にとって負担は大きいですが、勉強になることも多い。一人ひとりの生徒の英語を見てフィードバックすることは、英語理解力を把握し、その理解力に基づいた個別指導ができる機会であると同時に、教師からフィードバックすることで生徒は心強く感じるからである(松本・山岡, 2018)。

### 3.4. 生徒による授業アンケートと結果

年度末に授業アンケートを実施した(欠席者及び公欠者7名, 回答者数73名)。

アンケートは、表1のようにAは学習者自身の授業に対する取組, Bは教師の授業に対する取組及び活動等における生徒の印象, Cは自由記述の3つの部分から構成されていた。

表1 アンケートの構成

- A (1) 学習者の授業の予習・復習の取組状況  
(2) 学習者の授業に対する意欲的な取組状況
- B (1) 教師の話し方  
(2) 時間配分, 授業の進め方の適切さ  
(3) 教材の適切さ  
(4) 生徒の理解度を確認しながらの教師の授業進行  
(5) 帯活動における「話す力」の効果  
(6) Express Yourself 活動における「書く力」の効果  
(7) グループ活動における発表の学習効果  
(8) 授業を通じて伸びた英語力  
(9) 授業に対する満足度
- C 自由記述

このうち、話したり書いたりする言語活動を中心に、生徒の情報や考えなどを伝える能力の向上を図るため、「英語表現 I」の1年間の指導を通じて行った具体的な活動に係る項目は、B(5)~(9)及びCである。表1のアンケート項目のB(5)~B(7), B(9)に関しては、表2に示す5件法で調査を行い、授業内活動の効果及び満足度についての回答結果を表したものである。また、図4は表2を図示したものである。

表2 生徒による授業内活動の効果及び満足度

	そう思う	どちらか といえば そう思う	どちら とも言 えない	あまり そう思 わない	そうは 思わな い
B(5)	34%	38%	22%	3%	3%
B(6)	47%	41%	11%	0%	1%
B(7)	44%	51%	1%	3%	1%
B(9)	22%	62%	10%	5%	1%

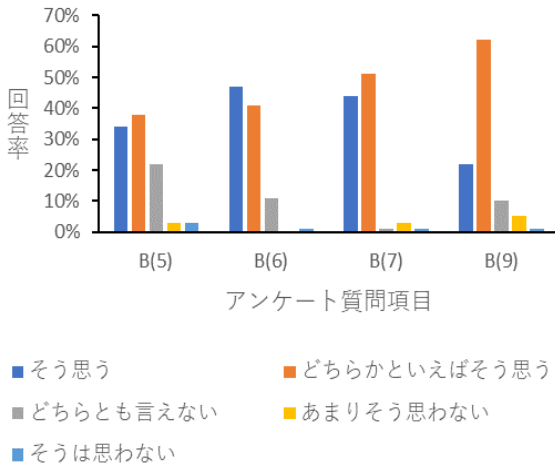


図4 生徒による授業内活動の効果及び満足度

「B(5) 帯活動における『話す力』の効果」については、「そう思う」25名(34%), 「どちらかといえばそう思う」は28名(38%), 「どちらとも言えない」は16名(22%), 「あまりそう思わない」は2名(3%), 「そうは思わない」は2名(3%)で、72%の生徒が「話す力」に効果があったと感じている。

「B(6) Express Yourself 活動における『書く力』の効果」については、「そう思う」34名(47%), 「どちらかといえばそう思う」30名(41%), 「どちらとも言えない」8名(11%), 「あまりそう思わない」0名(0%), 「そうは思わない」1名(1%)で、88%が「書く力」に効果があったと感じている。

「B(7) グループ活動における発表の学習効果」については、「そう思う」32名(44%), 「どちらかといえばそう思う」37名(51%), 「どちらとも言えない」1名(1%), 「あまりそう思わない」2名(3%), 「そうは思わない」1名(1%)で、95%が発表を通じて、「他の人の考え」や「英語の表現」を学習する機会になったと感じていることがわかる。

「B(9) 授業に対する満足度」については、「満足している」は16名(22%), 「どちらかといえば満足している」は45名(62%), 「どちらとも言えない」は7名(10%), 「あまり満足していない」は4名(5%), 「満足していない」は1名(1%)であった。肯定的な回答が88%を占めており、授業に満足していたことがわかる。

「B(8) 授業を通じて伸びた英語力」については、複数回答が可能な質問項目であり、表3及び図5に示した。

表3 授業を通じて伸びた英語力

話す力	聞く力	読む力	書く力	文法力	語彙力	発表する力	不明	その他
42%	41%	15%	48%	40%	8%	22%	8%	0%

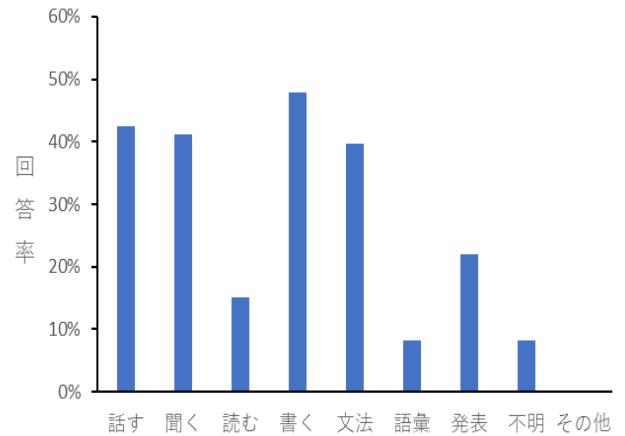


図5 授業を通じて伸びた英語力

「話す力」は31名(42%), 「聞く力」は30名(41%), 「読む力」は11名(15%), 「書く力」は35名(48%), 「文法力」は29名(40%), 「語彙(単語)力」は6名(8%), 「発表する力」は16名(22%), 「わからない」は6名(8%), 「その他」は0名(0%)であった。「書く力」、「話す力」、「聞く力」、「文法力」の順に英語力が伸びたと感じていることがわかる。

最後にアンケートのCの自由記述について、一部を原文のまま紹介する。

- ・他の授業ではペアワークといっても、だいたい隣の人とだけであったり、同じ人となので、英表では様々な人と話せて楽しかったです。また、教科書のテーマに沿って作文をすることが多くあり、考え、それを英語にする力が、今までよ

り付いたのではないかと感じています。2年でも、楽しんで英語の授業に取り組んでいきたいです。

- 中学のときよりも話す機会が多く最初は慣れなくて大変だったけれど最後は他の人の意見を聞きたいと思えるようになりました。お題の写真を説明してペアの人がお題を当てる授業が楽しかったです。1年間ありがとうございました。
- 1年間ありがとうございました。英語の文法などタメになることが多かったです。
- 文法が中学のときより細かく、難しくなったのにあまり復習をしなかったから新しいことが身につきませんでした。学年末のテスト中に反省して、今勉強中です。ディクテーション楽しかったです。
- 英作文を添削してくれるのはありがたかった。
- スピーチとか単語当てゲーム(?)とかで英語で伝える力がついたと思う。人変えたりとか多くて楽しかった。
- 自分は書くのと話すのが苦手だったので、授業や宿題で書いたり話したりする機会があるのはとても良いと思う。
- コミュ英に授業が似ていてもっとがっつり文法を学ぶ時間にしてほしかった。
- 対話が多いのも良いが、もう少し文法の授業の回数をふやしてほしい。
- 1年で2年までの文法終わらせる勢いでやってほしかった。
- 文法ごとに使われる頻度などを知りたい。

肯定的な意見を書いている生徒がいる一方、もっと深く文法を学習したいという意見を書いている生徒もおり、コミュニケーションと文法の均衡を保つのは難しいと感じる。

#### 4. 考察

話したり書いたりする言語活動を中心に、生徒の情報や考えなどを伝える能力の向上を図るため、「英語表現 I」の1年間の指導の中で様々な活動を行ってきた。生徒のアンケート結果から、「帯活動における『話す力』の効果」については、「そう思う」と「ど

ちらかといえばそう思う」を合わせると72%で、7割以上の生徒が「話す力」に効果があったと感じていることがわかった。また、「Express Yourself 活動における『書く力』の効果」については、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると88%で、約9割の生徒が、効果があったと感じていた。さらに「グループ活動における発表の学習効果」については、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせると95%が発表を通じて、効果があったと感じていた。「読む力」や「聞く力」等を含めた技能別に伸びた能力については、「書く力」が35名(48%)で最も多く、次いで「話す力」が31名(42%)、「聞く力」が30名(41%)、「文法力」が29名(40%)、「読む力」が11名(15%)となっていた。「英語表現 I」の1年間の授業を通して、生徒は「書く力」及び「話す力」に相当する能動的な技能、つまり、情報や考えなどを伝える能力が向上していると感じていたことがわかる。「読む力」がこの中では最も低くなっているが、科目の目標が「読む力」の育成に主眼を置いていないことから当然の結果といえるだろう。甲斐(2018)はコミュニケーション英語 I の実践を報告し、同様のアンケートを実施し、「読む力」及び「聞く力」に相当する受動的な技能が「話す力」及び「書く力」に相当する能動的な技能よりも伸びたと報告していた。甲斐(2018)では、「書く力」について伸びたと感じている生徒は4技能の中で最も低かったが、本実践では、「書く力」が対照的に最も高かった。本実践は、「書く力」を伸ばすための指導に関して、1つの示唆を与えることになるだろう。

#### 5. おわりに

「話したり書いたりする言語活動を中心に、情報や考えなどを伝える能力の向上を図る」ことを、1年間を通じて実践し、生徒の言語行動の変化を調べた。生徒に行ったアンケートの結果から、「書く力」及び「話す力」、つまり、情報や考えなどを伝える能力が向上していると生徒が感じていたことがわかるとともに、授業にも満足している様子が見られる。ただし、満足度が上昇したことが実際の英語力が向上したということと必ずしも一致するとは限らない。授業の満足度の上昇に伴って、実際の英語力も1年

間の指導を通じて、上昇するのかどうかの検証研究が必要である。今後の研究課題として、取り組んでみたい。

平成30年7月に、新しい高等学習指導要領が告示され、「英語表現Ⅰ」に代わり、「論理・表現Ⅰ」が新たに選択科目として創設された。この科目では、特に、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッション、1つの段落の文章を書くことなどを通して、論理の構成や展開を工夫して話したり書いたりして伝える、または伝え合うことなどができるようになるための指導を行うことになっている(文部科学省, 2019)。本実践で示した「情報や考えなどを伝える」から一歩踏み込んで、「論理の構成や展開を工夫して話したり書いたりして伝える、または伝え合うことなどができるようになる」ことを意識した指導が今後は必要となってくる。生徒の英語力、発信力を高めるため、より一層の研鑽を積んでいきたい。

## 6. 引用文献

- 甲斐順 (2014). 思考力・判断力・表現力等を育むための一工夫: 協同学習を活かしたプロダクティブな活動. 語研ジャーナル, 13, 49-56.
- 甲斐順 (2016). 『改訂版 入試必携 英作文 Write to the Point』を活用した取組一状況例を活用した対話作りと自由英作文一, CHART NETWORK, 80, 14-16.
- 甲斐順 (2017). 指導技術 Q&A Q: 「教科書の本文の内容に関する音声による正誤問題は、生徒に聞かせて正答を確認して終わらせています。他の活用方法はありますか?」, 語研だより, 339, 3.
- 甲斐順 (2018). 情報や考えを的確に理解したり適切に伝えたりする基礎的な能力を 養う英語指導一高等学校「コミュニケーション英語Ⅰ」における教育実践一日本大学大学院総合社会情報研究科紀要, 19(1), 65-76.
- 北野功祐・松坂伸彦 (2017). 文法指導にアクティブ・ラーニングを取り入れた英語授業 Dialogue: TALK 紀要, 15, 17-23.

- 松本涼一・山岡大基. (2018). 先輩教えて ここが知りたい指導のコツ [10] 英作文での添削指導をどうするか 英語教育, 66 (11), 46-47.
- 文部科学省 (2010). 高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編, 開隆堂出版.
- 文部科学省 (2019). 高等学校学習指導要領 (平成30年告示) 解説 外国語編 英語編, 開隆堂出版.
- 小倉美津夫・山本万紀子 (2016). 高等学校における英語指導法改善とパフォーマンス評価 日本福祉大学全学教育センター紀要, 4, 1-20.
- 白畑知彦・富田祐一・村野井仁・若林茂則 (2009). 改訂版 英語教育用語辞典, 大修館書店.
- 土屋澄男(編著) (2011). 新編英語科教育入門, 研究社.

(Received: June 19, 2019)

(Issued in internet Edition: July 1, 2019)